

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 梶 茂樹 印

学位申請者 阿部優子

論文名 ベンデ語（バントゥ F.12, タンザニア）の記述研究
－音韻論，形態論を中心に－

ベンデ語は、アフリカのほぼ赤道以南に広く話されるバンツ系の言語1つで、タンザニア西部のタンガニーカ湖東岸で話されている。ベンデ語の北西部に隣接して話されるトンゲ語もベンデ語とほぼ同一の言語で、実際、阿部氏によれば、基礎語彙の93%が同源で、しかも単語の発音が声調まで含めてまったく同一であるという。この両者の区分は、キリスト教カトリックの導入に発する地理的なものに過ぎないようである。話し手は、この両者合わせて約4万人と推定されるが、近年、東アフリカの共通語であるスワヒリ語が国語として学校教育などを通してこの地方にも伸びてきており、現在では、そのすべてがベンデ語（あるいはトンゲ語）のみの話し手というわけではない。実情はむしろ逆で、そのほとんどすべてがスワヒリ語との二重言語話者で、若い人の中にはもはやスワヒリ語しか話せないという人もいるという。そういう意味で、このベンデ語・トンゲ語は危機言語であり、早急そして精密な調査が望まれるところであった。

ベンデ語（あるいはトンゲ語）については体系的な研究はなく、この阿部氏のものが、世界で最初の体系的記述研究となる。阿部氏は、ベンデ人を主たるインフォーマントとして調査をしており、本論文は、「ベンデ語の記述研究」と題されている。阿部氏は、この言語を2000年から2005年にかけての9ヶ月半を費やし調査してきた。この地域は、主都ダルエスサラームから遠く離れ、どんなに急いでも車を乗り継ぎ、数日はかかる所である。そういったところで、地道にフィールドワークを続け、一級の資料を得、かつ体系的に文法をまとめたということは、大いに評価されなければならない。音韻論と形態論を中心にまとめたという事は、大いに評価されなければならない。音韻論と形態論を中心にまとめたという事は、大いに評価されなければならない。音韻論と形態論を中心にまとめたという事は、大いに評価されなければならない。音韻論と形態論を中心にまとめたという事は、大いに評価されなければならない。

以下、まず本論文の内容を紹介し、適宜コメントを加えていく。本論文および別冊は、次の構成になっている。

序章	ベンデ語および本論文の背景
第1章	先行研究
第2章	音声、音韻
第3章	声調
第4章	名詞構造
第5章	動詞構造
第6章	文の構造
終章	総括と今後の展望

まず序章では、ベンデ語を取り巻く社会言語学的背景が示される。特に、ベンデとトングエがこれまで2つの異なる民族・言語集団であるとされてきた点について、ここでは1つの集団、そして言語であり、その違いは地域的な違い、すなわち言語については方言的なものであることを示される。また本章では、その他、調査地、インフォーマント、調査票など、現地調査時の諸条件が示される。

第1章はベンデ語、ベンデ族についての先行研究に関する概観である。実は、トングウェ族については、チンパンジーなどの霊長類学や、植物学、人類学の分野においては、1960年代から日本人によって研究が豊富に積み重ねられてきている。トングウェ語・ベンデ語については、日本人人類学者による簡単な語彙集などを別にすれば、現地調査に基づいた精密な記述はなく、イギリス人、アメリカ人、フランス人などのよる断片的な記載があるのみである。しかし、それでもこのトングウェ語・ベンデ語が、同じバンツ一系でありながら、周辺言語と少し異なるということが浮かび上がってくる。

第2章は、分節素に関する音声・音韻論的記述である。子音音素が19 (/p, b, t, d, c, j, k, g, m, n, ŋ, N, f, s, z, h, y, w/)、そして母音音素が長短の区別を加えて10 (/a, e, i, o, u, aa, ee, ii, oo, uu/) がある。母音がV₁V₂と2個連続し、V₁が高母音で、後続のV₂により半母音化した場合、そこに代償延長が起こると述べられているが、*moongá* /mu-onga/ NPx3-river 「川 sg.」 vs. *myongá* /mi-onga/ NPx4 「川 pl.」 のような例では、前者はooと書いてあるので、/mu-o/ → mwo: → mo:と半母音化と代償延長が起こったことは明白であるが、後者のようなmyoという表記では、代償延長が起こっているのかわからない。これはまた、*mítwě* 「頭 sg.」 のような例の場合、wěという表記では、この言語がバンツ一祖語の母音のモーラ性を保っているということも判りづらい。*mútué* という表記の方がより妥当ではないか。同じ母音の場合は、例えば*múcheé* 「芽 sg.」 と書かれている。また母音調和に関しても、小辞*ná* 「と (ともに)、によって」に関しては、その変化を母音調和で説明するのはどうであろうか。特に、クラス9の名詞の前で*ne*となる場合が問題となる。鼻音結合NCVの前で*ne*となると書いてあるが、接頭辞NのないCVの前でも*ne*となるのである。むしろ名詞に初頭母音があり、/na imbusi/ → *nembusi* 「山羊と」 のような母音融合が起こっていると考えるのが普通でないか。確かに、そう考えると、/na amanaga/ → *nemanagha* 「力で」 のような場合にはなぜ/na a/が/ne/となるのか説明が必要となるが、これは初頭母音が何らかの条件でaからeあるいはiに変わったということもあるかもしれない。あるいはこの小辞がもともと*né*である可能性もある。もう少しの探求が必要である。さらに、pとhの交代、dとlの交替には形態音韻的考察が必要である。

第3章は、声調に関する議論である。一般に、バンツ一系諸語では声調は単語の意味を区別するだけでなく、時制の区別など文法的にも機能する。ただしベンデ語の声調は、その表れに制限があり、音節ごとにH(高声調)、L(低声調)の現われが決まっているというよりも、名詞、形容詞、動詞の語幹・語根が特定の声調型を持っていて、それが単語(場合によっては句)全体に実現されると見た方が合理的である。阿部氏は名詞、動詞のいずれもH型、L型、P型のいずれかに分類されるとする。H型とは、孤立形において、単語全体がHとして実現されるもの、L型とは語幹初頭がLとなり、その他がHとなるもの、P型とは終わりから2音節目がHとなり、その他がLとなるものである。P型はベンデ語では少し特殊な振る舞いをするが、これは多くはスワヒリ語からの借用語である。なお動詞も基本的に名詞類と同様に考えられるが、活用形によっては動詞語根の声調に関係なく活用形としてのパターンを被せるものがある。ただし、これもベンデ語だけに特徴的ではなく、他のバンツ一諸語にも見られるものである。本章では12の声調規則が提示されているが、規則の性質が音韻論的なもの、形態論的なもの、統語論的なものなど様々なものが混在しているので、整理が必要である。また、孤立形

だけでなく、コンピュータ文における述語名詞になった場合など、それぞれの現れにおける声調実現の規則についても考察を加えるべきである。

第4章は名詞形態論である。名詞のクラスの存在はバンツ系諸語の大きな特徴の1つである。ベンデ語には18のクラスがあり、通常、クラス1とクラス2、クラス3とクラス4というふうに2つのクラスがペアになり名詞の単数形と複数形を示す。名詞類の基本的構造は、接頭辞一語幹であり、名詞がどのクラスに属するかは形態論的にはその接頭辞によって示されている（統語的には、付加形容詞、主語動詞の接頭辞などの文法的一致によって示される）。なおベンデ語では名詞の初頭母音は、旧情報など特定の文法的コンテキストにしか現れないようである。本章では、名詞のみならず、代名詞、所有詞、数詞など名詞類接頭辞以外の接頭辞を取る語類、また名詞修飾なども取り扱っている。さらに、動詞の名詞化、副詞的名詞なども本章の考察範囲である。副詞的名詞については、定義をもう少し明確にする必要がある。

第5章は、動詞形態を取り扱う。バンツ系諸語は一般に膠着語的であり、動詞の変化形はいくつもの形態素が連なる複雑な構造をなす。ベンデ語では要素はPreSM-SM-PostSMⁿ-PreR-ROOT-EXTⁿ-PreF-Fのように8つある。これらが組み合わせることで多くの変化形を生み出す。ベンデ語では単純形肯定に25、そして単純形否定に19の活用形がある。また2つの変化形の組み合わせで表現される複合形では、肯定が8、そして否定が6の活用形を有する。動詞の変化形が全体像としてどういう形になるかは、必ずしも各形態素の足し算では説明できない。特に、声調がどうなるかは大きな問題である。この問題について阿部氏は丹念に形を拾い考察を進めている。尤も、基本となる語根（ROOT）の声調についてももう少し丹念に考える必要がある。A.E.Meeussenの言うRadical（語根）とExpansion（接尾辞）の区別を阿部氏は立てていないが、動詞の3つの声調型のうちL型について、LとHの境目がMeeussenの言うRadicalとExpansionの境目に対応するのではないか。

第6章は統語論に関するものであるが、統語論のすべての問題を扱ったものではない。語順と文法的一致の問題、主語の問題、また受動文や命令文などの文タイプの問題、従属節や比較構文などである。一般に形態論の複雑な言語は、文法のかなりの項目を形態論で扱えるし、逆に形態論の単純な言語は統語論に多くの比重を置かなければならない。ベンデ語は前者のタイプであり、実は統語論の多くは第4章、第5章の形態論の項目で扱われている。ただ、使役、受身、適用などの構文もその形態だけでなく、項の増減という観点からも議論をして欲しかったという指摘があった。

終章は、本論文の総括と、ベンデ語・トングエ語の方言差をまとめて示してある。また本論文で残された問題と、今後の研究の方向性を示している。別冊では、約2800のベンデ語語彙が英語—スワヒリ語—日本語訳とともに示されている。

本論文は、現地フィールド調査に基づきつつも、考察はたんに共時的なものにとどまらず、pの弱化、7母音体系から5母音体系への変化とそれに関連する阻害音の摩擦音化、マインホフの法則、声調変化など、考察は通時的な側面にも及ぶ極めて包括的なものである。アフリカの奥地の極めて調査の条件の悪い所でこれだけのデータを集め研究を進めたことは、賞賛に値するだけでなく、驚異的でさえある。これは阿部氏がたんに1言語の研究だけに特化することなく、幅広く多くの文献を求め、バンツ系語研究においてどういったことが問題となるかをはっきりと認識していたからであり、この点、すでに独り立ちの研究者として一歩踏み出していると言える。ただ、審査委員の中から、他人の著作を参照するのはいいが、それにとらわれすぎではないか。むしろ、そういうものを一切排除して自分の得たものだけに基づいて考察を進めるべきではないかという指摘もあった。もちろん、ベンデ語の細かな点については今後も調査・研究を推し進めていかねばならないし、また審査委員会で指摘されたことも本人がはっきりと意識している部分である。

以上を総合して、本論文は博士（学術）の学位を与えるにふさわしいものであると審査委員全員が一致した。